



ふじみだい

校長 田村 憲一

保土ヶ谷駅から学校に向かう急な坂道を、子どもたちと一緒に上りました。

「疲れた～。気持ち悪い。なんだか吐きそう…」そんな友達に寄り添う子どもたちがあったか
いのです。「大丈夫?」「がんばって!」「もう少しだよ。」と励ます子、かばんを持ってあげる子。
さらに貴重なアドバイスも。「ほら『ヒー・ヒー・フー』ってしてごらん。あれ?!違ったっけ?」
「うん、なんか『ヒー・ヒー・ゲー』ってなりそう」・・・あったかい子どもたちです。

今日みたいな授業は、みんなで考えるから好き

昨年度の3月のことです。2年生の国語の授業を見ていたとき、ひとりの子どものノートに目が
留まりました。そこには振り返りとして、「今日みたいな授業は、みんなで考えるから好き」と書いて
あります。すてきな言葉だったので思わず手帳に書き写しました。

「主体的・対話的で深い学び」が求められています。分かるようで分からない言葉なのであまり
使わないようにしていますが、最近「これってそうかも」と思ったエピソードがありました。

生活科で学校探検をしている1年生。ある日、大勢で校長室にやってきました。教室の蛍光灯
が切れてしまったので、直してくれる人を教えてほしいと言うのです。「うかつに教えなくてくださ
いね」という願いを満面の笑みに込めた担任の表情を見ながら、どう答えるべきかうろたえる校長。
こういう時のとっさの判断力に課題がある私は、「ん!?ああ、そういえば、校長室の蛍光灯が切れ
たときに直してくれた人がいたなあ。紹介しようか?」と口走り、「しまった!」と思いました。でも、こ
こからの子どもたちがすごかった。「紹介して」とは言いません。「この蛍光灯を直したってことは、
はしごがいるね。」「はしごがある部屋を探せばいいんだ。」「わたし、はしごみたいなのが置いて
ある部屋知ってる!」「どこどこ?行ってみたい!」 こうして用務員室にたどり着き、無事に蛍光灯を
交換してもらうことができました。こうした学び方は、小学校に入って急に身についたわけではあり
ません。園でも同じような学びを経験してきたのでしょう。本校でも力を入れている、「スタートカリ
キュラム(園での育ちや学びを小学校の学習に滑らかにつなげるための取組)」の成果なのかもしれませ
ん。

この「蛍光灯問題」は、解決までにずいぶんと回り道をしましたが、そのプロセスは、子どもたち
にとって「主体的・対話的で深い学び」だったのではないかなと思います。大切なのは、このやり取
りの中で、「子どもたちが何を学んだのか」ということです。例えば・・・

○学校にはいろいろな人が働いていて、困ったときには助けてくれるんだ。(→他者への信頼)

○自分たちの力で問題が解決できた。わたしたちってすごい。(→自尊感情)

○これからも困ったことがあったら、みんなで考えれば何とかなるかも。(→協調性・楽観的思考)

このような、いわゆる「非認知能力(横浜では社会情動的コンピテンシーと呼んでいるようです)」を育むこと
が、「主体的・対話的で深い学び」に、そして子どもたちの未来の幸せにつながると信じています。

「みんなで考えるから好き」 学校では、そんな授業を目指して日々挑戦中です。